

AICHI
PREFECTURAL
MUSEUM
OF
ART

MEMBERSHIP

愛知県美術館友の会 会報 第51号

空中回廊

コレクションから：松本竣介《ニコライ堂》

コレクション展：洋画特集

会員のひろば：展覧会解説動画上映会、講座、鑑賞会、総会記念講演会
新学芸員紹介、新館長から



S.M. 12

コレクション展 洋画特集

2021年10月8日～11月21日

愛知県美術館では、2016年に「日本で洋画、どこまで洋画？」というタイトルのコレクション展を開催しました。洋画という言葉自体が西洋を念頭に置いた言葉であり、日本において、西洋の影響を強く受けて展開されたそれを、コレクションを通して改めて見つめ直してみようという内容の展示でした。実際に日本では明治後期以降、いわゆる洋画を中心に画壇が形成され、それらの史的な位置づけもなされ、一般にも長い間人気を博するほど普及してきましたので、これまで文化会館時代を含めて長い間作品収集活動を行ってきた当館のコレクションのみを通してでも、ある程度は近代における洋画の流れを追うことが可能となっていました。

しかし残念ながら昨今では洋画の人気にも翳りが見えるようになってきました。社会の変動にともなって多様化、分散するアート・シーンの中で、洋画の相対的地位も変化し、近代以降の洋画が注目される機会が以前ほどではなくなっているようです。とはいえ、その理由が洋画自体の価値が減じているということに起因するわけではありません。相対化していく動向の中で、より日本の「洋画」を意識的に見て行くことが必要になってきているのではないか、前向きにみれば洋画も新しい段階に入ったと言



黒田清輝 《暖き日》1897年
油彩 50.2cm×61.0cm

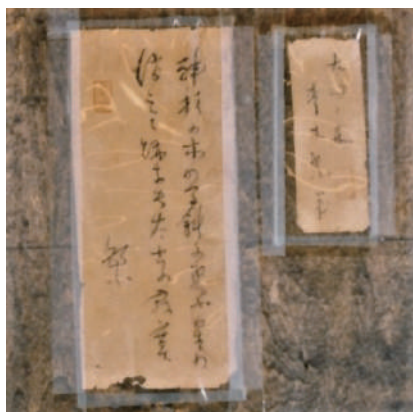
えるのではないかと考えています。

今回のコレクション展の特集では、久しぶりに洋画に焦点を当てます。優れた作品をみなさまにご覧頂きたいというのは当然のことなのですが、展示を準備していく中で、この作品はこういう意図があったのか、題名の意味はこうだったのか、などなど、新たな発見もあり、そのような新たな知見を紹介しながら、あらためて当館の洋画コレクションをじっくりとご鑑賞いただきたい、という思いを強くしました。

一例を挙げたいと思います。先日青木繁の《太田の森》という作品を収蔵庫で実見しました。写真で見る通り、画面いっぱい緑が広がり、中央の大木の横に人影が見える作品です。青木と言えば重要文化財に指定されている《海の幸》(1904年)や《わだつみのいろこの宮》(1907年)などの浪漫主義的傾向の強い作品を想起される方が多いのかと思います。そのようなイメージを抱きながら《太田の森》を暗い光の中で見てみると、何を描いているのかわからない、不思議な作品にしか見えませんでした。作品の裏側を確認してみると、画廊の出品ラベルなどとともに古い紙が貼り付けてありました。片方は「太田の森 青木繁筆」というものですが、もう片方は字が崩さ



山本芳翠 《月下の裸婦》1882-86年頃
油彩 60.6cm×80.3cm



作品の裏面に張られた古紙に書かれた
タイトルと短歌



青木 繁 《太田の森》1902年
油彩 45.5cm×60.9cm

れており、すぐには判読できませんでした。写真を撮って職場の事務机に戻り、じっくりと読んでみると下記の様な文字が記されていることがわかりました。

「神杉の木の間斜に飛ぶ星の
消えて跡なき太古の寂寞 繁」

「神杉の木の間」という言葉から、表側の絵と関係の深い事が類推されます。更に全体の文字数を数えてみると、五、七、五、七、八、と短歌調となっていることがわかります。そういえば、青木は短歌も多く残していることが知られています。ひょっとすると、と思い、青木の短歌を調べてみました。没後出版された『青木繁画集』(政教社 1913年)には「うたかた集」と「村雨集」という短歌集が掲載されています。「うたかた集」は青木が福岡県の久留米から上京し、神話を題材に絵画を制作していた頃に詠まれたとされたもので、「村雨集」は1907年8月に帰郷した後に詠まれたものと言われています。そうすると、青木が上京したのは1899年であり、1902年に制作された《太田の森》は「うたかた集」と時期が重なるのではないかと考えられます。そこで「うたかた集」の56首の短歌を確認すると、37首目に「神杉の木の間斜に飛ぶ星の 消えて跡なき太古の寂寞」と作品裏

書そのままの短歌があったのです。

もう一つの発見はタイトルです。《太田の森》制作の頃の青木は信州や群馬にスケッチ旅行を行っていました。てっきり「太田」は群馬の太田あたりではないか、などと勝手に想像していたのですが、1903年から森田恒友と同宿した東京・千駄木の下宿を、同郷の盟友・坂本繁二郎が「太田の森の下の家」と呼んでいたことがわかりました。この「太田」は、江戸時代には太田撰津守(太田道灌の子孫です)の下屋敷があったことからその名がとられ、明治の頃には「太田の原」と呼ばれたそうです。この辺りには森鷗外ら文化人が住まいを構えたことで知られ、現在でも「千駄木ふれあいの杜」として残っています。

上記のことを踏まえて考えると、古事記や日本書紀を読み漁り、古代への憧憬を絵画や短歌に投影していた青木が、自宅近くの身近な光景に神秘を見出し、「太古の寂寞」に思いを馳せた作品が《太田の森》であった、ということになるでしょう。詩と画の融合を理想とした青木の真骨頂があらわれた作品であったのです。

本展ではこのように作品のプロファイルに注目することにより、作品を様々な面から見直してみようを試みたいと思っています。

愛知県美術館 企画業務課長 平瀬礼太

南 雄介 館長による「GENKYO 横尾忠則」展 解説動画 上映会

2021年3月11日(木) 愛知芸術文化センターアートスペースAにて

新型コロナウイルス感染拡大により、横尾忠則展の特別鑑賞会の開催も断念せざるを得ませんでした。しかし美術館のご厚意により、南館長解説の動画を友の会会員に向けて配信することが出来たのです。そしてネット環境が整わない会員に向けては、配信動画の上映会を開催しました。初めて観た方はもちろん、既にパソコンで観た方からも「大画面で迫力があった」と好評でした。これからも、美術の新しい楽しみ方を提供できるよう挑戦していきます。

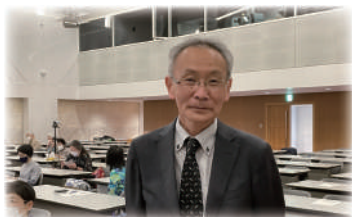


長時間でしたが大画面で解説を楽しむことができました

友の会講座

演題「正倉院宝物の輝き」 講師 関根 俊一 氏 (奈良大学 教授)

2021年5月1日(土) 愛知芸術文化センターアートスペースAにて



奈良時代前期、光明皇后は聖武天皇遺愛の宝物を東大寺大仏に献納され、それらは『国家珍宝帳』という長さ16mにも及ぶリストとともに正倉院北倉に納められました。

明治になると、宝物がはじめて一般公開され、修復や模造製作も始まります。「螺鈿槽箆篋(らでんそうのくご)」などの復元模造も作られました。

ところで、昔「校倉造は高温多湿から宝物を守っている」と教わりましたが、実は長雨による被害は回避でき

ず、宝物が無事だったのは二重の箱に保管されていたからだそうです。

この講座は2020年の緊急事態宣言以来、初めての講座でした。人数制限はありましたが、皆さんの楽しまれている様子が嬉しかったです。



久しぶりの講座で、楽しく勉強されていました

総会記念講演会 演題「美術と私」 講師 拝戸 雅彦 館長

2021年5月29日(土) 愛知芸術文化センターアートスペースAにて



拝戸館長はまず「アートとは、見えるようにすること、あるいは感覚できるようにすることだ」そのために「何を、どうやって、どうして」いっかが大切なのだとおっしゃいました。

講演会では愛知県美術館に勤務するまでのいきさつや、イタリア留学時代、作家の辻邦生夫妻との交流などの話とともに、2010年から開催され

たあいちトリエンナーレのチーフキュレーターとしての、想像以上に苦勞された話なども聞かせてもらいました。



学生時代に研究していた作品も紹介されました

徳川美術館 鑑賞会

2021年5月8日(土)

「刻を描く 田淵俊夫」展

講師 神谷 浩 氏 (徳川美術館 副館長)

緊急事態宣言発出後、二度目の徳川美術館訪問です。まず前回同様、別室にて神谷副館長のレクチャーを聞いた後自由鑑賞です。

展覧会は五章に分けられていて、それぞれ「水と光」「草と花」「旅と刻」「人の刻」「命と光」となっています。

神谷さんは「田淵俊夫先生の絵画は、形式上は伝統的な日本画だが、内容的には内面を表現すべきだ」という戦後日本画壇の問題提起を明確に継承している」とおっしゃっていました。

今回の展覧会は永平寺の《雲水》と智積院の《春(枝垂れ桜)》が同時展示されています。



展覧会の説明をする神谷浩副館長

どちらも卓越した水墨画ですが、特に智積院の枝垂れ桜は水墨画でありながら、心に残る桜色と花の匂いに包まれてむせかえるようでした。

名古屋市美術館 鑑賞会

2021年6月4日(金)

「ランス美術館コレクション

風景画のはじまり コローから印象派へ」展

講師 勝田 琴絵 氏 (名古屋市美術館 学芸員)



展覧会の解説をする勝田琴絵学芸員

講堂にて勝田学芸員によるレクチャーを聞いたあと自由鑑賞です。同時開催の「アートとめぐる はるの旅」展の充実した資料もいただきました。

シャンパンで有名なフランスの古都ランス市と名古屋市が姉妹都市であり、ランス美術館の大改修を機に、至高のコレクションを生かして19世紀フランス風景画の展開を示す展覧会ができたとのこと。銀灰色の森が特徴のコローの傑作16点が並んでいる展示室は静謐ながらも圧巻でした。またバルビゾン派の画家たちの作品の新鮮な色彩、そこから生まれた印象派の画家たちの生き生きとした筆触は現代的ですらありました。

第51号 友の会活動紹介 2021年3月～2021年8月

- 3月 「GENKYO 横尾忠則」展の解説動画上映会
- 5月 友の会講座 関根俊一 氏
鑑賞会 徳川美術館「刻を描く 田淵俊夫」展
特別鑑賞会「トライアローグ」展 動画配信
総会・記念講演会「美術と私」愛知県美術館 館長 拝戸雅彦 氏
- 6月 鑑賞会 名古屋市美術館
「風景画のはじまり コローから印象派へ」展
- 7月 定例活動のみ
- 8月 鑑賞会 豊田市美術館「モンドリアン展」



「トライアローグ」展の特別鑑賞会(夜の部)

友の会 これからの活動予定

(変更が生じる場合があります)

- 9月 鑑賞会 刈谷市美術館「野口哲哉展」
 - 10月 特別鑑賞会「曾我蕭白」展
- 日時未定ですが鑑賞会・講座なども計画中です

追悼

去る7月27日、設楽知昭氏(元愛知県立芸術大学美術学部長)がご逝去されました。設楽氏には友の会、初の試み「おうちで美術鑑賞会」にて作品と創作にまつわるお話を披露していただきました。ご生前のご厚情に深く感謝し、謹んで哀悼の意を表します。

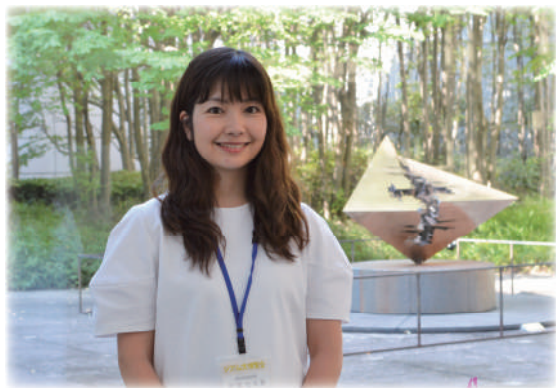


定例活動

所蔵品管理	モニター	発送	受付 <small>【聴】</small>	広報	ホームページ	理事会
0回	2回	3回	7回	3回	随時更新	4回

芹澤なみき - Serizawa Namiki -

初めまして。4月から愛知県美術館に赴任しました芹澤なみきと申します。3月までは大学院でイタリア初期ルネサンスの祭壇画について研究していました。当館のコレクションは近現代の作品が中心ですが、作品の細部に宿るさまざまな要素や意味、作者の意図などを理解する



ことで新たな気づきを得られるという点は、どちらにも共通しているように思われます。その意味で両者の距離は思っていた以上に近いというのが最近の実感で、現在は当館の膨大なコレクションを必死に勉強中です。また、美術館のアーカイブにも関心があります。この空中回廊もデジタルアーカイブされているためウェブ上で創刊号からみることができ、おかげさまで、これまでの当館の取り組みや活動について詳細に知ることができました。

愛知県美術館でのさまざまな活動を通して、皆様と一緒に美術の魅力や奥深さを探っていけたらと思っています。これからどうぞよろしくお願いいたします。

鵜尾佳奈 - Uo Kana -

友の会の皆さま、初めまして。出身は神戸市で、主にパンと洋菓子を食べて育ちました。日本学術振興会の研究員として大阪の大学で勤めた後、広島市現代美術館で非常勤学芸員として働いてから、名古屋にやって来ました。愛知県美術館の学芸員としてお世話になるはずが、採用されて早々に国際芸術祭「あいち」推進室に配属になりました。初めての芸術祭運営で嵐のような毎日ですが、愛知県がこれまで以上に文化芸術を発信する拠点となるよう力を尽くしていこうと思っています。

専門は戦後アメリカ美術で、主にミニマル・アートの研究をしています。趣味はヴィンテージの服や骨董、食品サンプル、マグネットを集



めることです。音楽や映画も好きなので、これから名古屋のアンダーグラウンドシーンやミニシアターを掘り下げていきたいです。お詳しい方がいらっしゃいましたら、是非ご教示ください。

こころの風景 《ニコライ堂》

1912 年生まれの松本竣介は、太平洋戦争前後の激動の時代を生き抜き、終戦からおよそ 3 年後に 36 歳という若さでこの世を去りました。竣介は身近な人物をはじめ、都会の人々の生活や市街風景などを数多く描いており、深みのある色彩や、繊細さと力強さが共存する線の中にどこかぬくもりを感じさせる彼の絵は、今も多くの人々を惹きつけています。

今回ご紹介する《ニコライ堂》(1941 年)は、東京・神田にある東京復活大聖堂、通称ニコライ堂を描いたもので、この建物は竣介が繰り返し好んで描いたモチーフのひとつでした。同じ年に描かれたものだけでも油彩画とデッサンを合わせると 7 点にのぼり、その後も同じモチーフを何度も描いています。興味深いのは、それらが必ずしも実際の風景に即した写実的な絵ではないということです。例えば同名の広島県立美術館の作品や宮城県美術館の作品は、実際には橋があるはずの部分に別の風景が組み合わされていることが指摘されています。繰り返し描くうちに、画家は心の中にひとつの情景を作り上げていったのかもしれない。1941 年は太平洋戦争が始まった年であり、この作品も、まさに戦争が始まる 12 月に描かれたことがわかっています。木炭や鉛筆などを使って単色で

仕上げられた本作は、全体的に重く張りつめた雰囲気とある種の憂いを帯びていながら、同時に静かな安らぎのようなものも感じさせます。ニコライ堂のどこか現実離れた姿は、次第に重苦しさを増す世相の中で、竣介の心の拠りどころとなっていったのではないのでしょうか。

本作をよく見ると中央に小さく 2 人の人物が描かれていますが、実は、ある角度からみるとそこに立ち姿の第 3 の人物が浮かんできます。鉛筆で輪郭だけが描かれているこの人物が誰かはわかりませんが、同年から翌年にかけて制作された《画家の像》(宮城県美術館)や《立てる像》(神奈川県立近代美術館)においても自らの凜とした立ち姿が描かれていることから、それはもしかすると画家自身かもしれないとつい想像してみたくになります。

しばらく《ニコライ堂》を眺めていると、画面から静謐さが感じられ、不思議と気持ちが落ち着いてきます。新型コロナウイルス感染症や気候変動による災害など、先のみえない不安の中で暮らす日々が続きますが、どんな時でもこうした風景をこころの片隅に抱きながら現実に向き合っていきたいと思わせてくれるような一枚です。

愛知県美術館 学芸員 芹澤なみき



広島県立美術館所蔵 松本竣介《ニコライ堂》1941年 油彩・板 32.0cm×41.0cm



松本竣介《ニコライ堂》1941年 鉛筆・木炭・インク・紙 37.9cm×45.5cm



新館長から 「愛知県美術館に入った頃」

愛知県美術館は1992年の10月に新館として再オープンしました。私は1991年4月に愛知県庁に入り、県庁内の美術館の準備室を経て、1992年4月から美術館に配属になりました。読書と講義で美術史を学ぶ学生の立場からの就職でしたから、愛知県美術館も含めて美術館の活動の内容については、一般的なことしか知りませんでした。利用者としての愛知県美術館の経験は、もちろん旧館時代のことですが、展覧会とコレクション室だけです。なかでもモディリアーニ展（1985年10月23日～11月7日）は記憶にはっきりと残っています。また、今にして思えば貴重な経験だったのは、数回ですが団体展の展示手伝いのアルバイトです。その時に、搬入用のエレベータに入るなど、美術館の裏側を少し垣間見ることができました。

私が愛知県庁に就職した1991年は、バブル景気がはじける前夜でした。私は1989年から数年間国内にいなかったこともあり、離れる前の名古屋と戻ってきてから見た名古屋の変化を意識することは、あまりありませんでした。バブル時代に東京で起こっていたことは、美術史の学生にとっては全く意味のない情報で、雑誌で知るのみです。ところが愛知県庁に学芸員として入ってみると、愛知県はクリムトを始めとする高額作品を購入していて、数千万から億の単位の話聞くわけですが、その金額に実感はありません。ただ、他館に務めていた先輩の学芸員からも、作品の購入額と

自分の給料の差に愕然とするという感慨は聞いていました。もちろん、私のような新人の学芸員は美術館の収集に直接関わることはなく、先輩学芸員が決めてきた作家と作品の調書を、他館の収集状況を調査するなどして作るだけです。私の主な仕事は、美術館広報担当（という役割が当時はまだ学芸員にあって、いかにも開館前の最終段階で加わった学芸員の仕事ですが）で、招待状のリストづくり、広報資料の送付、展覧会のチラシやポスターを配布するというものでした。そしてもう一つの大事な仕事はアートライブラリーのための選書です。

今からすると、開館当初はのんびりしていたように思います。大学時代のイタリアルネサンス研究とも普通に両立させることができ、分科会のレベルではありますが、美術史学会で発表もしていました。ただ、美術館が開館して数年たち、先輩学芸員の企画展の仕事を手伝えるようになると、大学時代の研究からは距離ができてしまい、企画展などの仕事の現場の慌ただしさに飲み込まれていきます。それが何故か楽しくやりがいを感じるようになってしまい、現在に至っています。

愛知県美術館 館長 拝戸雅彦

これからの展覧会のご案内

編集後記

57年ぶりに描かれたブルーインパルス[®]の五輪マークは不鮮明。しかし飛行映像だけで、ここに至るまでの年月を思い胸が熱くなりました。離れていてもリアルな雰囲気を味わえる状況だって、ここ数年の副産物ですが…。

- 編集 松下智子 稲垣真美代／井上真紀子／喜田泉／小林克敏／冨永晃一／森健次
- 協力 愛知県美術館
- 発行 2021年9月

友の会入会のご案内

詳しい活動内容を知りたい方、入会をご希望の方は事務局（下記）までお問い合わせください。入会のご案内パンフレットやホームページでも詳しく紹介しております。ぜひご覧ください。

受付場所 ★愛知県美術館 10階受付
★友の会事務局 ★振込可

愛知県美術館友の会

〒461-8525 名古屋市東区東桜一丁目13-2
愛知県美術館内（愛知芸術文化センター10階）

✉ info@apmoa-tomo.com

ホームページへのアクセスはこちらから

愛知県美術館友の会

apmoa-tomo.com

tel. 052-971-5511 (代)

fax. 052-971-5617

(火・木 11:00~15:00)

[twitter](https://twitter.com/apmoafriends)

@apmoafriends

